

「Review of Clinical Research in Gastroenterology」

Editors

Masakazu Maruyama, M.D., Ken Kimura, M.D.

北里大学東病院院長

岡 部 治 弥

B5判サイズ、270頁ほどの、手頃な大きさの英文の単行本である。これは、1966年の発刊以来、二十数年続いた月刊誌「胃と腸」のいわば、エスプリを選出編集した初めての英文書であり、その目的は、この二十数年の歴史の中で培った消化管疾患の臨床的研究の成果を海外に紹介しようとするものである。長い間、計画されてはいたが漸くにして実現した待望の書である。日本のこの面における多くの優れた業績は、日本語で発表されているというハンディキャップのために海外の研究者によるほとんど重流的研究の中にオリジナルの文献として紹介されることなく現在に至っており、口惜しさを禁じえなかった人は多いことと思うが、本書の出版は「胃と腸」の発刊に関与した1人としての喜びを禁じえない。

英文は英国のYork District Hospitalのconsultant surgeon, J.C. Craven氏の協力により、統一された流麗な、読みやすい文章となっている。まず編者による序文の冒頭は次のように記されている。“本書は月刊誌「胃と腸」から編集され英文

化された初めての本である。24編が選ばれているが、最近の「胃と腸」誌に掲載された論文を主とし、そのほかに、この書のために新たに纏められた論文数編を含んでいる……”と。

最初の2編はいわば総論または序論である。第1編は「胃と腸」誌の紹介およびその歴史が簡潔にまとめられている。第2編内視鏡のoverviewは早期胃癌の診断から始まり、その後新しく開拓された数多くの内視鏡診断領域の紹介を簡明に記述し、最後に電子内視鏡の登場により、辺地でのmass surveyが可能となること、更にやがては世界各国間で、画面を見ながらのdiscussion可能時代の到来などの夢が記されている。残り22編の論文の内容は食道より大腸・肛門に至るまでの全腸管の癌を主体とし、更に脾、胆道の微小癌も含めた内視鏡診断学およびX線診断学の実態がまとめられている。執筆者はすべて長年それぞれの分野で研究を続けてきたいわばバイオニアの人たちであり、その内容は国際的にも第1級のレベルのものである。そのほかに早期胃癌を多数

例含む膨大な手術例の5年生存率を精細に分析して現在提唱しているNew TNM分類についての優れた内容の1篇も含まれている。

本書を読み終えて感じることは、本書ならば欧米の消化器病を学ぶ若い医師や専門医にとって優れた指導書になるだろうということであり、すばらしい臨床研究が日本で進展し、このような大きな成果を結んでいることを正確に伝えるであろうということである。個人的なことであるが、自らが検査する立場を去り、現在、新しい文献に目を通す機会を持ちにくくなった自分にとって、今回誠に意欲の高ぶりを覚える時間を持つことができた。

胃カメラ、X線二重造影法および病理組織の共同研究により早期胃癌診断の研究が始まった時代から、約30年、その後の幅広く全消化器の領域に発展してきた日本人による診断学の成果が、この一書に凝集されているという感じである。

また、少し気障っぽいかもしいないが簡潔にまとめられた英文を読むほうが長い日本語を読むよりも、より深く理解しえるような気がする。英文を読むことに、より気持ちの集中を必要としたからかもしれない。今後、英文で発表する機会のますます増える消化管診断学や新治療学を追求する若い諸兄姉にとって必携の書として推めたい。座右の書として熟読再読する価値のある本である。

B5判 278頁 1988年 定価5,500円
送料300円

医学書院 刊